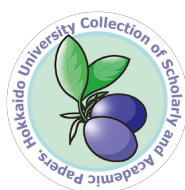




Title	初期イエズス会における修練と教育：習慣形成としてのexercitium
Author(s)	下口, 円
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 145, 129-145
Issue Date	2024-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.145.129
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93861
Type	departmental bulletin paper
File Information	10-1882-1669-145.pdf



初期イエズス会における修練と教育

——習慣形成としてのexercitium——

下 口 円*

【目次】

1. はじめに
2. イエズス会と『靈操』
 - (A) exercitiumの系譜——習慣形成と服従
 - (B) 『靈操』
3. 『イエズス会会憲』
4. 『学事規定』とイエズス会の教育——「練習」と「修練」
5. 小括

【キーワード】 イエズス会, イグナチウス・デ・ロヨラ,
修練, exercitium, アスケーシス

1. はじめに

イエズス会の創設者であるイグナチウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola, 1491-1556) の『自叙伝 (Autobiografia)』は、次のように始まる。

かれは26歳まで、この世の虚栄を追求する人間だった。特に名誉を獲得しようとの空しい欲望に激しくかれ、軍隊の修練 (ejercicio de armas) に喜んで励んでいた。¹

聖人伝を読み回心する前の「かれ」はドン・キホーテの如く騎士道物語を耽読し、「高貴な貴婦人」に想いを寄せる騎士であった。日頃修練に励み、戦闘で足に重傷を負った際にも麻酔もない時代に大手術の激痛を「こぶしを固く握りしめ」耐え抜く、強靱な忍耐力を持った人間であった。

イエズス会司祭で歴史家のJ.W.オマリーは*The First Jesuits*と題した初期イエズス会に関する包括的な研究において、イエズス会の最も重要な成果はイグナチウスの『靈操 (exercitia spiritualia)』と「学校」の二つであると結論づけている²。事実イエズス会は両者の領域においてとりわけ注目されてきた。前者の『靈操』については「修練史」や「靈性史」の文脈において、まずは古代文献学者P.ラボーによる研究が想起されよう。ラボーはストア派以来の「道徳的修練」にキリスト教的修練の先駆けを見つもの、『靈操』において「魂の指導 (Seelenleitung)」を旨とする修練は最高潮に達するものとする³。ラボーを高く評価するP.アドも『靈操』は古代ギリシャ・ローマ哲学の「精神の修練」の伝統に連なるものであると述べ⁴、J.ルクレルクによるキリスト教修練史の整理も、『靈操』へと収斂していく観がある⁵。

* 北海道大学大学院教育学院修士課程 学校教育論講座
DOI: 10.14943/b.edu.145.129

こうした霊的修練の精華という評価とともに、イエズス会は教育史研究において近代学校教育の礎を築き牽引したとする言説が就中20世紀フランスにおいて見られる。イエズス会教育がフランスの国民的特質を形成するのに大きく貢献したとまで述べたE.デュルケームに始まり⁶、彼の仕事を引き継いだP.ブルデューがイエズス会教育は互換性を持つ「製品」を、競争心を煽ることで世俗的名誉を崇拜する「ヒエラルキー人間 (homo hierarchicus)」として作り上げたと苛烈に批判する⁷。Ph.アリエスは本稿でも取り上げるイエズス会の『学事規定』において権威の体制と青少年の隔離へと向かう学校内規律 (discipline) が確立したと述べ⁸、M.フーコーも規律・訓練 (discipline) の分析においてイエズス会の学級編成の原理を取り上げている⁹。日本では高祖敏明がイエズス会教育の総合的な紹介を行い¹⁰、近年では桑原直己が日本のキリシタンの活動も含めた研究を行っている¹¹。

以上比較的盛んな近年のイエズス会研究ではあるが、『靈操』、一般的に言って神秘主義の系譜に連なる修道士の修練の精華を生み出し実践し広めたという側面と、ブルデューらが言うように「世俗的」な近代学校教育の雛形を作り支配的となるまで拡大せしめたという二つの側面を、整合的かつ説得的に把握しうる視座を示し得た研究は未だ存在しないように思われる。そこで本稿ではイエズス会文書におけるexercitiumという言葉に着目して『靈操』、『会憲』、『学事規定』という三つの主要テキストを分析することで、その視座を示すことを試みるものである。exercitiumはイエズス会それ自体の歴史的布置と組織の特質を把握するのに恰好の言葉であるが、同時にそれは近代学校教育の揺籃期において学校で行われていた実践が「修練」であったことを示すに至るだろう。また先述の高祖による研究に代表されるように、従来の研究ではイエズス会教育について定めた『会憲』の4部が中心に分析され、残りが捨象されてきたきらいがあるが、本稿では『靈操』と『学事規定』とを媒介するテキストとしてイグナチウス自身が書いた『会憲』にその他の部も含めて着目したい。

2. イエズス会と『靈操』

(A) exercitiumの系譜——習慣形成と服従

はじめに『靈操』へと至るラテン語exercitiumという言葉の歴史を簡単に素描しておくことが先決である。ルクレルクによれば、「引き出す」「追求する」「休ませない」「(土地を)耕す」「修練する」ことを意味した動詞exerceoから名詞exercitusが生まれたとされる。exercitusはもともと「修練」を意味する名詞であったが、カエサル『ガリア戦記』における用法などが想起されるように、「軍事訓練」や「軍隊」を専ら示すようになった。そこで「修練」の意味を引き継いだのがexercitium やexercitio, exercitatioといった言葉であるが、後世に至っても目立った差異は見られないため本稿では主にexercitiumについて扱う¹²。

exercitiumは古代ギリシャ語で「修練」を意味する $\alpha\sigma\kappa\eta\sigma\iota\varsigma$ や $\mu\epsilon\lambda\acute{\epsilon}\tau\eta$, $\gamma\upsilon\mu\acute{\nu}\alpha\sigma\iota\omicron\nu$ といった語に相当し、それらを翻訳するのに使用されていた。さらに本稿の文脈において重要なのは、古代哲学において極めて広範な意義を持った $\alpha\sigma\kappa\eta\sigma\iota\varsigma$ や $\mu\epsilon\lambda\acute{\epsilon}\tau\eta$ とその翻訳語としてのexercitiumは古来より習慣形成と密接に結びついていたということである。例えばプラトンの『パイドン』においてソクラテスの輪廻思想が明かされる箇所を16世紀フィチーノによるラテン語訳とともに示せば、「そして、当然、かれらは、なんであれ生前自分たちが修練 ($\mu\epsilon\mu\epsilon\lambda\epsilon\tau\eta\kappa\upsilon\iota\alpha$, $exercuerunt$) してきたような習慣 ($\eta\theta\eta$, $mores$) の中へ、入り込むのである。」¹³と述べられ、

さらに『国家』においてはかの「教育（*παιδεία*）とは向け変えの技術（*τέχνη περιαγωγῆς*）にほかならない」という一文に続く箇所で「魂の徳とふつつ呼ばれているものが色々であるけれども、身体の徳の方に近いのかもしれない。なぜなら、それらの徳は実際に、以前になかったのが後になってから、習慣づけ（*ἔθελαι, consuetudine*）と修練（*ἀσκήσεις, exercitacione*）によって内に形成されるものだからね。」¹⁴とあるように、既にプラトンの著作において修練が習慣の形成と不離の関係にあったことは明白である。擬プルタルコス『子供の教導について』においては修練と習慣の結束について、またその教育論上の位置付けについて明確な言及がなされ、就中ルネサンス期教育論に多大な影響を及ぼすこととなる。該当箇所をグリアーノによるラテン語訳とともに示そう。

つまり、完全に正しい行為をなすためには、ピュシス（*φύσιν, naturam*）とロゴス（*λόγον, rationem*）とエトス（*ἔθος, consuetudinem*）の三つを共に働かせねばなりません。この場合にわたしは学び（*μάθησιν, disciplinam*）をロゴスと呼び、修練（*ἄσκησιν, exercitacionem*）をエトス（*ἔθος, consuetudinem*）と呼んでいます。最初の始まりは自然的素質であり、次に学びによる進歩があり、そして修練による使用（*χρήσεις τῆς μελέτης, exercitio ac meditatione*）、これら三つのすべてがあって完璧になります。それらのいずれか一つでも不足すれば、その分に応じて徳が不完全なものになるのは必然です。なぜなら、学ばなければ自然的素質は盲目であり、自然的素質に不足すれば学びは欠けたものになり、そのいずれもがないなら修練は徒労に帰するからです。¹⁵

まずここには古代中世の教育論を論じる上で看過することのできないソフィスト以来の「素質（*φύσις*）」「学び（*μάθησις*）」「修練（*ἄσκησις*）」という三要素が織りなすトリアーデが見られる。この系譜を辿り要素間の緊張関係の変化を描出する課題は別稿に譲ることとするが、引用文からは件の*ἄσκησις*（*exercitium*）が単なる「学び（*μάθησις*）」とは区別されむしろそれを「使用」により補完する役割を持つということ、そしてやはり「習慣（*ἔθος, consuetudo*）」と同一視されていることが読み取れる。これはアリストテレスの『政治学』における、「人は三つのものによって善く有徳な者になる。その三つとはピュシス（*φύσις*）エトス（*ἔθος*）ロゴス（*λόγος*）である」¹⁶との一節を受け、その習慣論を教育論へと接続したものと考えられよう。

以上のように*ἄσκησις*や*μελέτη*が*exercitium*と訳され、*ἔθος*の訳語としての「習慣（*habitus, consuetudo, mores*）」と結びつけられていたのは近代初頭の言語状況に限られたものではない。既にキケロ（*Marcus Tullius Cicero, B.C.106-A.D.43*）は『弁論家について』において修練と習慣の分ち難い結びつきを強調して止むことがなく、「わたしの語っているのは間然とするとところのない弁論家の神的な能力についてなのではなく、修練（*exercitationis*）と習慣（*consuetudinis*）から得られた、あくまでわたしの凡庸な能力についてである」¹⁷、また「この能力を与えてくれるのは修練（*exercitatio*）であり、修練からは習慣（*consuetudo*）が生まれる。」¹⁸と、擬プルタルコスがアリストテレスの習慣論を修練という実践へと結びつけたように習慣を生むものとして修練を位置付けるのである。

初期キリスト教の時代においてもアレクサンドリアのクレメンス（*Titus Flavius Clemens, ca.150-ca.215*）はグノーシスの文脈において修練による習慣形成論を披瀝している。曰く、

「覚知に満ちた修練（*ἀσκήσει γνωστικῇ*, *exercitatione cognitione*）によって、徳を害われぬものにまで形作った者には習慣（*ἔξις*, *habitus*）が自然的なもの（*φυσιοῦται*, *naturalis*）として備わる」¹⁹と、修練に関して覚知という言葉が共に記され、ここでは修練により習慣が自然的なものとして備わると述べている。中世に時代が降るとドミニコ会士トマス・アキナス（Thomas Aquinas, 1225-1274）もまた『神学大全（*Summa Theologiae*）』第2部の第1部第65問題第1項において、『ニコマコス倫理学』の習慣論に関して「人間は同時に、すべての倫理徳（*virtutum morarium*）がかかわることがらに関して修練を積む（*exercitetur*）ことが必要である。こうして、すべてのことがらに関して修練を積む（*exercitetur*）ならば、すべての倫理徳の習慣（*habitus*）を獲得するであろう」²⁰と述べ、修練によるあらゆる倫理徳の習慣の獲得を主張する。トマスの習慣論は以下で見るようにイエズス会の修練にも一定の影響を及ぼすこととなろう。

キリスト教的修練の系譜においてイエズス会との関わりから言及すべきは、とりわけ修道院内での服従を目指した修練である。まさしく修練におけるこの「服従」のテーマを発展させたのが、小スキュティア出身とされる修道士で、若年期からエジプトなど東方の修道院を巡り、晩年にはその知見を生かして西方で初めてマルセイユに修道院を開いたヨハネス・カッシアヌス（Johannes Cassianus, 360-435）であった。カッシアヌスが直接聞いたヨアンネス神父の話では、かつて修道士の先輩は乾き腐った薪の端を薪置き場の地面に突き刺し、ヨアンネスに一日二回の水やりを命じた。命じられたヨアンネスは一年の間休むことなく、不平を漏らすことなくこの命令を実行したのだが、最後には木片に根があるのかと問うた彼に対して、先輩修道士は木を引き抜き投げ捨て、水やりを止めるように命じたのだ。またヨアンネスは先輩に何人がかりでも動かすことができないような大きさの岩を一人で転がすように命じられ、実行した²¹。さらにパテルトゥムスとともに修道院に入った幼い我が子が檻褓をまわされ日常的に暴力を受けるのを耐え忍び、さらには先輩の命令で子供を川へと捨てに行った²²。こうした修練についてカッシアヌスは次のように言い放つ。

このような修練によって教養されて（*exercitiis eruditus*）、若者は謙遜の徳において毎日成長し、服従の恩寵によって輝きました。それから彼の服従（*oboedientiae*）の甘美な香りは全ての修道院に広まっていきました。²³

上記のような荒唐無稽とも思われる修練の数々は修道院における教養に他ならず、それにより謙遜と服従の徳を育てることができるというのだ。

古代ギリシャ以来の習慣形成論を、カッシアヌスを主要な典拠としつつ服従を目指した修練と総合しイグナチウス・デ・ロヨラを通じてイエズス会に重大な影響を与えたのが、14世紀後半から15世紀にかけてオランダを中心に北ヨーロッパに広まった信仰運動である「デヴォチオ・モデルナ」、そこから生まれた「共同生活兄弟会」の初期主要メンバーであったF・ラーデヴェインス（Florent Radewijns, 1350-1400頃）やG・ツェルボルト・ファン・ズトフェン（Gerard Zerbolt van Zutphen, 1367-98）、トマス・ア・ケンピス（Thomas a Kempis, 1379/80-1471）らの著作であった。彼らの著作では*exercitium*が人間形成を領導する語彙として据えられるが、それはトマスによる『霊的修練の書（*Libellus spiritualis exercitia*）』²⁴、『霊的修練の短い勧告（*Brevis admonitio spiritualis exercitia*）』²⁵にも明らかである。半俗共同体で

ある兄弟会は「習慣は習慣により打ち負かされる (*consuetudo consuetudine vincitur.*)」を標語として掲げ霊的修練により「靈魂の能力の再形成」に取り組む一方²⁶、『キリストにならいて』では登場人物のキリストが「わが子よ、服従 (*oboedientia*) を拒否しようと努めるものは、すなわち神の恵みを斥けるものである。…それゆえ自身の肉のみをつねに制御していこうと望むならば、まず早速自身を長上 (*superiori*) に服従させる (*te submittere*) ことを学びなさい。」²⁷と述べるように、カッシアヌスを彷彿とさせるような長上への服従を重要視していた。こうした共同生活兄弟会の思想はツェルボルトやヨハネス・マウブルヌス (*Johanes Mauburnus*, 1460-1501) を介しイグナチウスが黙想の指導を受けたモンセラート修道院の修道院長であったガルシア・デ・シスネロス (*Garcias de Cisneros*, 1455-1510) が書いた『霊的生活の修練 (*Ejercitatorio de la vida spiritual*)』へと流れ込むのである²⁸。したがって以上のような習慣形成と服従の観点から概観した修練の系譜は以下でイエズス会のテキストを分析する際に有効な視座となるだろう。

(B) 『靈操』

冒頭に掲げた言葉にあるように、イグナチウスは手術後のロヨラ城での療養中、手元にあったヤコブ・デ・ヴォラギーネの『黄金伝説』やルドルフ・フォン・ザクセンの『キリストの生涯』などを読み回心する。1521年、30歳のことである。1522年からは巡礼の旅に出るとともにバルセロナ近くのモンセラート修道院にてシスネロスの弟子であった長上の指導のもと修行を始め、マンレサに移ってからは生涯読み続ける『キリストにならいて』を発見し洞窟に起居、鞭打ちや断食などの苦行を実践しこの時カルネドール河畔において決定的な神秘体験を得る。この頃から自らの体験を他者に伝導し始め、その目的で『靈操』の核となる部分を執筆した²⁹。

それでは『靈操』を概観し、主要な点について分析を加えていく³⁰。靈操は四週間に渡る修練のプログラムである。一回一時間の長さでこれを一日五度繰り返し、それぞれ異なった内容の観想や黙想を行う。最初の一週間は、罪についての観想実践である。罪の観想には五種類があり、はじめに「罪の歴史」あるいは「三重の罪」についての観想、次に観想者自身の生涯と罪の特徴について、次に特に霊的な感動を受けた点について繰り返し観想を行うこと、四番目はこの繰り返し、最後に地獄についての観想である。二週目はキリストの生涯を最後の晩餐まで想起しながら実施する観想が中心である。五課題のうち一、二がキリストの生涯についての観想、三、四がその繰り返し、五が「感覚の祈り」、直接的な感受性の訓練である。三週目はキリストの最後の晩餐以降、殉教と死と埋葬を巡る祈りを捧げる一週間である。最終週はキリストの復活と顕現への祈りから始まり「愛の高みに達するための観想」が続く。

本書の序文とも言うべき「総注」においてイグナチウスが「霊的修練 (*Exercitiorum spiritualium*) とは、その名の示す通り、良心を究明する (*examinandi conscientiam*) こと、黙想する (*meditandi*) こと、観想する (*contemplandi*) こと、口禱や念禱をすること、その他、後に述べるような、他の霊的働きなどのあらゆる方法を意味する」[ES:4] と述べているように、靈操とは第一に観想や黙想による修練である。G.バタイユは靈操プログラムを「演劇化 (*dramatiser*)」³¹という言葉で特徴づけたが、確かにそこで修練者は凄惨な地獄の光景やキリストの生涯に己が身を置き、精神や意志を研ぎ澄ませることで眼前にイマージュを演出し、経験を自らのものとするよう努める。

次にこの修練プログラムは修練者のみではなく、「靈的修練を受ける人」にも向けて書かれていることに注意する必要がある。当然『靈操』以前にも修道院において長上や聴罪士が指導を行ってはいたが、本書において「靈的導き (spiritual direction)」が修練を行う二人の人間の強固で連続的な新たな関係性として練り上げられるのだ³²。もし靈操を実践する人の魂に「慰めや荒み」といった靈の動きが見られなければ、時間や規則を遵守しているかどうか修練者の行っている靈的修練について詳しく問いたす必要があるし (総注6)、修練者は尋ねられなくとも自分の心の動揺や考えを告白しなければならず (総注17)、靈の動きが修練者に見られるならば靈操を受ける人はその内容によって次の段階に進ませるか否かを決定したり観想の時間を調節したりしなければならない (総注9, 13, 14)。また、そもそも修練者の年齢や学歴、賢さや利発さなどあらゆる「性向 (dispositio)」を考慮に入れた上で靈操を受ける必要がある (総注18)。したがってここで「靈操を受ける人」は牧夫が群れの中から羊の個体を識別して適切に管理を行うように修練者を導くのである³³。最終的には神が修練者を直接導くとイグナチウスは述べる (総注15)。

同じく「総注」から、また巻末に付された「諸規則」から特に重要な点として、よく知られた「靈動弁別 (discretio spirituum)」が挙げられる。それは「魂のうちにふと起こるさまざまな動き (motiones) をなんらかの仕方を感じ取り、見分けるための規則。よい動きは受け入れ、悪い動きは放り出すため」[ES:295] のものである。魂のうちに起こる動きを察知して、それが善い靈に由来するのか、悪い靈によるのかを見極めねばならない。したがって悪霊は不安にしつつ悲しませ、善霊は勇気や力、涙や平安を与えるだとか、「慰め (consolation)」や「荒み」はどのようなものであるかといった、主体の解釈学を可能にする無数の技術が練り上げられていくのである。ここでも悪霊を退散させる有効な方法は聴罪士への告白であり、靈の仕業を白日の元に晒すことで悪霊は無念がるという³⁴。この文脈でイグナチウスにおけるかの「不偏心 (indifferentia)」を理解せねばなるまい。

もう一つ最後に『靈操』について指摘できることは、その修練規則の異様なまでの綿密さ、厳格さについてである。第一週の第一靈操だけを見ても、犯した罪を直線上に記録する一日に二度の「特別究明 (examen particulare)」に加え、罪を除去する「四つの付則」、よりよく告解するための「一般究明」またその五つの方法、三つの罪の黙想と二つの下準備、と無限に細分化されていく観がある。イグナチウスが「前提条件」において「靈的修練は、どんな乱れた愛着にも左右されずに、自分自身に打ち勝ち (vincat se ipsum)、生活を秩序づける (ordinet vitam) ことを目指している」[ES:39] と述べるように、ここには修練者の生活を合理的に組織せんとする徹底した意志が観取される。マックス・ウェーバーは、ベネディクト会から営まれイエズス会において決定的となる西洋の「キリスト教的禁欲 (christliche Askese)」を「合理的な生の導き (rationaler Lebensführung) の組織的に細部まで練り上げられた方法」であるとしたが³⁵、これは先に引いたイグナチウスの言葉と平仄が合うように思われる。以上述べたような性格を持つ『靈操』を用いてイエズス会員は自己形成を果たしてきたのであり³⁶、イエズス会の学校事業においてもその精神が反映されているのである。

3. 『イエズス会会憲』

前節ではイエズス会におけるexercitiumの註解とも呼ぶべき『靈操』を分析した。『イエズ

ス会会憲 (*Constitutiones Societatis Iesu*)』の分析に取り掛かる前に、回心を果たしたイグナチウスの生涯とイエズス会の発足、『会憲』の執筆過程を辿っておきたい。

1523年にイグナチウスはヴェネチアを経由してエルサレムに巡礼する。彼は聖地にとどまることを願ったが果たせず、スペインに戻り、バルセロナの学校で子供達と共にラテン語文法を学ぶ。その後アルカラ大学とサラマンカ大学で人文学を学ぼうとするが異端の嫌疑をかけられ断念し、1528年にパリ大学へと向かう。1535年の卒業までの間に彼は霊操を自ら授けることによってフランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier, 1506-1552) をはじめとする何人かの同士を得、1537年には共にヴェネチアへ出発する。1537年にイグナチウスが司祭の叙階を受けた後、1539年にはイエズス会結成に着手し、1540年に教皇パウルス3世によって『会憲』の原型となる「会派信条 (Formula)」が承認され、翌年にはイグナチウスが初代総長に選出される³⁷。

『会憲』の作成はその後イグナチウスの死まで続けられる。結局1556年にイグナチウスが死去した際に『会憲』は未完成であったが、秘書フアン・デ・ポランコ (Juan Alfonso de Polanco, 1517-1576) が仕上げを行い1558年の総会で承認を受けた³⁸。

『会憲』は10部から成り、上述のように純粋な規約文書よりかはイグナチウスの晩年の思索が結晶した作品という趣がある。exercitiumの本質に迫ろうとする本稿にとって重要なのは3, 4, 6, 10部であるが、最初に指摘すべきはイエズス会の特質である「服従 (obedientia)」の徳について述べる箇所であろう。第3部「修練期の者に対する世話とその進歩」第1章「霊魂に対する世話と諸徳への進歩」では、「服従において (in Obedientiae) より徹底的に自らを修練する (se exercean) ために、望ましく、また不可欠なことは、会の長上 (Superiori) や家の (domus) 長上のみならず、長上から権威を受け、長上のもとにいる職務担当者にも、その権威の及ぶすべてのことがらに関して、従うことである」³⁹と述べられている。誰に対して従っている場合でも、修練者がその者を通して従っているのはキリストである。さらに第6部「本会に組み入れられ、組み入れられた者自身に関すること」第1章は「服従」と題されており、次の一節から始まっている。少し長くなるが引用しよう。

聖なる服従 (sancta obedientia) について取り扱う。すべてのものが心を込めて服従を守り、服従について秀でる心構えを持たなければならない。義務づけられたことがらのみでなく、長上が命令を下さなくても、意志表示のみを示すことがらについても、従順でなければならない。[...] 特に服従の善徳 (virtutem Obedientiae) に全力を注ぎ、まず教皇に、次いで本会の長上に従う。[...] すべてのにおいて盲目的な服従をもって、反対するあらゆる考えと判断を打ち消さなければならない。[...] 屍 (cadaver) のように、あるいはどこでも、いかなる場合にも、杖を手にする者の意のままに使用される老人の杖 (senis baculus) のように、目上を通して神の摂理に導かれ、治められることを念頭に置かなければならない。[C:70 (191)]

1551年6月1日付の書簡ではイグナチウスが日頃「老人の杖」や「屍」といった例えを好み、自己の一切を放棄するこの態度こそが「不偏心 (indifferentia)」であると考えていたことが明らかにされている⁴⁰。またイエズス会の服従を論じる際にしばしば引き合いに出され「服従書簡」と呼ばれる1553年3月26日付の手紙では、服従 (obediencia)こそがイエズス会固有の徳であるとし、会員はあらゆる長上に従わねばならず、学院長と院長は管区長に、管区長は

総会長に、総会長は教皇（キリストの代理）にといったように、統治を完成させる厳格なヒエラルキー構造の必要性が説かれている⁴¹。尚この書簡では先に挙げたカッシアヌスの『靈的談話集』や『共住修道院規則』が引用されており、イグナチウスがカッシアヌスと同じく「服従の徳（*virtus obedientiae*）」に向けた「修練（*exercitium*）」を重要視していたことが読み取れる⁴²。服従が伝統的にキリスト教修道生活の三大誓願の一つであったことは言うまでもないが、それをイエズス会が固有の要諦として掲げていたことは強調しておく必要がある。

次にイエズス会の学校運営、教育実施の規則について書かれた「本会に留まる者が学識など隣人を助ける手段に関して受ける教育（*instruendis*）」と題された第4部である。まず題名について、ここで彼らが行うと述べている「教育」は*instruere*なのであって、元来「生を養う」ことを意味した*educatio*⁴³ではないことに注意する必要がある。『会憲』の内容をまとめた第10部においても、「学院から物的便宜を得られない盛式請願会員に学院の監督を委託して、その良い状態と規律（*disciplina*）を保つことは極めて役立つだろう。盛式請願会員からなる本会は、才能のあるものがキリスト者にふさわしい生活と学識（*in perfectione vitae, litterisque Christiano dignis*）を身につけるための教育（*instituendos*）を行う」[C:123 (274)]と「教育」は*instituere*とされている。

4部の序文では「本会が直接目指す目的は、会員と隣人の靈魂が創造された究極目的に到達できるように、靈魂を助ける（*animas juvare*）ことである。そのために、生活の模範（*vitae exemplum*）のほか学識（*doctrina*）とそれを伝える方法が必要となる」[C:32 (131)]と述べられている。ここでキーワードとなるのはまず会の目的としての「靈魂を助ける（*animas juvare*）」という言葉である。この言葉は『会憲』のみならず『靈操』や『自叙伝』においても幾度となく繰り返される。そもそも彼がエルサレム巡礼からの帰途において勉学に励む決心をしたのは、「靈魂を助ける（*ayudar a las ánimas*）」⁴⁴ためであった。ウィリアム・オマリーによれば、初期のイエズス会士たちは宗教改革の問題を教義に関する事柄よりもまず人間の靈魂の状態に関する問題、つまり「司牧（*pastoral*）」の問題として理解していた⁴⁵。「靈魂を助ける」という言葉はそうした司牧的配慮を直截的に示すものであり、その手段として「教育」が定位されていたことはいくら強調してもしすぎることはない⁴⁶。

また上記の一文の中では「生活の模範（*vitae exemplum*）」という言葉も注目に値する。この言葉は一つ前の引用文における「キリスト者にふさわしい生活（*vita Christiano dignis*）」に対応していると考えていい。キリスト者にふさわしい生活とは何か、それは第4部第7章において「これらの学校では、外部の学生をキリスト教教理に関してよく養成するように努めなければならない。可能であれば、毎月告白をさせ、たびたび説教を聞かせ、最後に、学識と共にキリスト者にふさわしい善い習慣を身につけるように配慮しなければならない」[C:45 (152)]とあるように、「キリスト者にふさわしい習慣（*mores Christiani digni*）」である。第4部第16章は「善い習慣」と題され「本会の大学に学識を得るために来る人々が、同時に善い習慣、キリスト者にふさわしい習慣を身につけるように、特別に配慮する」[C:59 (172)]とあり、学生が弁論を行うのは「話し方が修練される（*exerceatur*）のみならず、善き習慣を身につけるためである」し、「勉学に求められる勤勉さ（*dirigentia*）」について、あるいは善い習慣について何らかの不足があり、優しい言葉や戒めでは不十分な学生のために、本会以外の矯正者（*Corrector*）を置き」[C:60 (174)]彼が「処罰する（*castigat*）」とある。

イエズス会の「教育」とは、靈魂を助けるという司牧的配慮の最終的な目標に向けて、その

隣人を「キリスト者にふさわしい習慣」に向けて鍛え上げるものである。本稿では先に第1節(A)においてexercitiumが習慣形成論としての系譜を持つことを確認した。イグナチウスがモンセラート修道院で何らかの形で触れたとされるガルシア・デ・シスネロスの『霊的生活の修練 (*Ejercitatorio de la vida spiritual*)』では、『靈操』を髣髴とさせるような「よく秩序付けられた修練 (ordenados ejercicios)」の繰り返しによって「習慣 (habito)」が身につくとされる⁴⁷。『会憲』においてもexercitiumないしexercitatioが数多く使われていることが確認できる。第10部では「道具 (instrumentum) である人間を神と結び合わせ、御手によって正しく導かれるように人を整える手段」について、「善良さと善徳、特に愛と神への奉仕を純粹に志すこと、信心の霊的修練 (in spiritualibus devotionis exercitiis) においてわが主なる神と親しく交わること、他のあらゆる利益を求めず、靈魂を創造しあがなわれた主の栄光のみを目指して、偽りなく熱心に靈魂を救うことが挙げられる」[C:123 (273)] とされ、そうした霊的修練は学識 (doctrina) よりも高く評価するべきであると書かれている。第4部では勉学中であっても、「わが主なる神の栄光のために (ad Dei gloriam)」、精神的な修練 (in eisdem exercendis) に従事する必要がある」と述べられ⁴⁸、学院にいる間は「たとえ学習内容を役立てる機会がまったくないとしても、愛 (charitate) と服従 (obedientia) の労苦 (laborem) のために勉学する (studiendi) ならば、その修練自体 (exercenda ea) が至高の神の前に功德の多い業であると確信しなければならない」[C:41 (145)] と、勉学が愛、服従、労苦のための修練であるとされるのである。勉学の目標は第一に服従である⁴⁹。これもよく知られた1547年5月7日付ポルトガルのコインブラ学院宛の「完徳書簡」と呼ばれる手紙では、「全生涯と全修練 (exercitios) をことごとくこの目的、つまり神の栄光と隣人の救いに捧げる」ことがイエズス会の使命であるとし、そうした勤勉な修練を続けていけば「徳の習慣 (hábitos virtuosos)」を身につけることができると述べる⁵⁰。先に「イエズス会固有の徳」について述べたことを想起しつつまとめれば、イエズス会において勉学 (studio) をも包摂する言葉としてのexercitium ないしexercitatioは「服従の徳 (virtus obedientiae)」獲得を目指した「キリスト者にふさわしい習慣 (Christiani digni mores)」形成の手段であると定義づけることができる。この視座を保持しつつ『学事規定』を分析することにする。

4. 『学事規定』とイエズス会の教育——「練習」と「修練」

それでは最後にイエズス会が実際に行った教育について『イエズス会学事規定 (*Ratio atque institutio studiorum Societatis Iesu*)』を対象として分析していきたい。イグナチウスは結成当初教育事業に取り組むことを考えていなかったが、次第に会員養成のため教育の必要性を感じるようになったという。そこで会員が大学に通いつつ復習など補足の勉学を行う「養成の家」が作られ、スペインのガンディアの「養成の家」では教授資格を持つ会員が授業を行うようになる。次にシチリアのメッシーナがイグナチウスに一般青年へと開かれた学校設立を要請し、ジェローニモ・ナダル (Jeronimo Nadal, 1507-1580) らが中心となって1548年に正式に学校を設立する。後に詳述するがこの際「パリ方式 (modus Parisiensis)」に基づく学習体系が組織され実施されたことがこの後のイエズス会教育の方向を決定づけることとなる。1551年に設立されたモデル校となるローマ学院でも同方法に従って運営がなされ、高等教育過程も発展する中で明文化された学習体系が求められるようになり、1586年に『学事規

定』の草案が作成され、第5代総長クラウディオ・アクアヴィヴァ（Claudio Acquaviva, 1543-1615）を中心とした改訂作業を重ねつつ1599年に決定版が発表される。この決定版は1773年に教皇クレメンス14世によってイエズス会が解散させられるまでイエズス会教育の基本的な指針となった⁵¹。

『学事規定』の学年区分について記述しておく、学校体系は下級課程（studia inferiora）と上級課程（studia superiora）から構成された。さらに下級課程は初級、中級、上級3年間の文法学級（grammatica）に人文学学級（humanitas）と修辞学学級（rhetorica）が1年ずつ、上級課程（studia superiora）は3年間の哲学課程（philosophia）と4年間の神学課程（theologia）から成る⁵²。『学事規定』の概要については邦訳もあり、先行研究に譲る。

イエズス会士ガブリエル・コディナは1968年出版の『イエズス会士の教育方法の源泉へ（Aux sources de la pédagogie des jésuites）』において、イエズス会の教育方法が先述した「パリ方式（modus Parisiensis）」さらには「共同生活兄弟派」学校の教育方法にその源泉を持つことを豊富な史料により跡付けて見せた⁵³。これまで何度か依拠してきたオマリーも、イエズス会士はルネサンスの人文主義者から教育の哲学を、パリ方式からは方法を受け継ぎ自ら発展させることはなかったとしている⁵⁴。両者が寄稿した『学事規定』制定400周年を記念する論文集でも同様の主張が繰り返され⁵⁵、奇妙なことにイエズス会が行った教育方法の独自性の否定を強調するという風潮が見て取れるようになった。

そうしたある種硬直した研究状況の中で石田頼治は「『イエズス会学事規定』に見る教育とハビトゥス形成」において重要な問いかけを行ったように思われる⁵⁶。石田は従来の研究が『会憲』4部の「生活の模範」と「学識」のうち前者を見落としてきたことを指摘し、両者を結びつける教育的な原理としてイエズス会がトマス・アクィナスのハビトゥス論を見出したのではと仮説を提起する。さらにトマスの「思慮の徳（virtus prudentiae）」こそが身につけるべきハビトゥスであり、その手段として『学事規定』、就中下級課程規則と修辞学課程規則に規定される「記憶の修練（Memoriae Exercitatio）」が定位され、その修練に向けて「イエズス会学校の教育はすべて」組織されていたと結論づける。

本稿は『学事規定』研究における石田論文の画期性を認めつつも、いくつか反論を提起しておきたい。第一に「生活の規範」とは前節で分析したように「キリスト者にふさわしい習慣」の言い換えなのであって、わざわざトマスのハビトゥス論を持ちださなくともイエズス会は習慣形成を教育目的に掲げていた。第二に、そこで身につけるべきイエズス会の「枢要徳」は何よりも「服従の徳」であり、これも敢えてトマスの「思慮の徳」を持ち出す必要はない。第三に、「記憶の修練（Memoriae Exercitatio）」だけがイエズス会の修練ではない。なぜなら『学事規定』においては1節（A）で確認したように習慣形成論へと取り込まれたexercitium, exercitatioという言葉は「記憶の修練」以外にも頻繁に用いられ、以下に述べるようにそれは必ずしも記憶の定着を目的としたものではないからである。以下、『学事規定』、就中概括的な規定が述べられている「下級学級教師の共通規定」を中心に分析したい。

本項目の目標は「教師は、本会の教育（disciplinam）に委ねられた青少年が人文学を学ぶとともに、何よりもまずキリスト者にふさわしいよい習慣を身に着けるように配慮すべきである。しかし、折を見て授業のときにも、あるいはそれ以外のときにも、特に目指すべきことは、青少年のまだ柔らかな心を、神に仕え、神を愛し、また神に喜ばれる善徳に向けさせることである」⁵⁷と定められている。この一文は教育言説史研究において意味深甚である。こ

こで「教育」と訳されているdisciplinaとは、七十人訳聖書において鞭打ちを含む「訓練・懲罰」を意味するヘブライ語ムサル(mūsār)のギリシャ語訳であるπαιδείαのさらにラテン語訳として扱われ、disciplina christianaとして中世修道院生活を領導した言葉であるからだ⁵⁸。またサン・ヴィクトルのフーゴーではdisciplinaが蜜蝋の比喩を交えた習慣成型論として用いられていたことを考慮に入れば、「柔らかな心」にお馴染みの「よい習慣」を身につけさせるという配慮がキリスト教教育思想の伝統に添ったものであることが了解される。実際、本目標の後には授業前の祈り(oratio)、毎日のミサ、教理学習や訓話に続いて毎月の告解(confessio)と続き、鞭も登場する。前節の『会憲』でも言及されていた通り、生徒に「学習の熱心さ(diligentia)」や「よい習慣(bono mores)」の点において過失がある場合には、会員ではない「懲戒担当者(corrector)」、あるいは生徒のうちから1人が鞭打ちを行う旨が規定されている[RS:163]。

具体的な学習規則については、コディナが、イエズス会がその大部分を取り入れたとされる「パリ方式」について「それを一言で定義するなら、「修練(exercise)」である。人間のすべての能力と資質を用いる「霊操(spiritual gymnastics)」としての修練と絶え間ない練習(practice)である」⁵⁹と述べるように、『学事規定』でもexercitatioが頻繁に用いられている。「演習」や「練習」、また「鍛錬」といった訳語が充てられているが、本稿の文脈上「修練」に統一する。その中でも石田の指摘の通り「記憶の修練」は重要な位置を占めるが、それは本項目がある意味で『学事規定』における修練の性格を特徴づけているからである。「記憶の修練」では、生徒たちは授業で習った教材の暗記した箇所を各十人隊長(decurio)の前で、さらに隊長は最高十人隊長(decurio maximus)または教師の前で暗誦する[RS:187]。「十人隊長」とはベネディクト会修道院における「十人係長(decanus)」に相当する役職であり⁶⁰、教師によって任命され、彼らの務めは「暗誦を聴くこと、作文を集めて教師に手渡すこと、生徒たちが暗誦中に行き詰まった回数、作文を怠った者の名前、清書した作文のほかに当初の作文を持ってこなかった者の名前について、メモ帳に印をつけることである。そのほか、教師が依頼することを行う」[RS:197]と規定されている。そのさらに上の役職である「最高十人隊長(decurio maximus)」の本来の名前は「監察官(censor)」であり、各学級に1人配置されて学級内での逸脱行為を監視し(observare)、教師に報告する仕事を持つ[RS:161]。十人隊長また監察官が行うのはとりもなおさず、検閲(censure)であり監視(surveillance)であることが分かるだろう。実際『学事規定』は検閲に満ちており、教師すらもカリキュラムの忠実な運営という点において、教務主任や学院長の監視の目を逃れることはできない[RS:183]。イグナチウスがイエズス会のヒエラルキー的服従の必要性を説いていたように、この学校では全ての人間が何らかの上司に、またカリキュラム自体に服従している。

そしておそらく、この観点から『学事規定』の修練一般を見る必要があると思われる。先に引いた「記憶の修練」の項目に書かれた続きを読むと、まず「教師は毎日、怠りがちな生徒や遅刻する生徒を数人指名し、暗唱させる」とあり、さらに土曜日には、1週間分、または数週間で暗記したものを皆の前で暗唱させ、扱った著作の1巻分全体を終了した後にはある生徒を選んで教壇に立たせ、その教材を最初から復唱させた上で、褒賞を与えることもできる、とする。さらには文法学級では毎日作文の提出が義務付けられ、それを教師が添削している間には、「多種多様な修練(exercitationes variae)」行う[RS:189]。その他にも「特殊な修練(extraordinariae exercitationes)」や「復習(repetitio)」に教材解説の授業と、そのカリキュ

ラムは止むことがない。またよく知られたイエズス会教育の特徴である「競争(concertatio)」は下級学校の全過程に共通しており、ここでは競争者を二陣営に分け、さらに陣営内は市民(privatus)と役員(magistratus)に分けられる。各役職の称号は古典ギリシャかローマの民事ないし軍事から取られ、各生徒も相手の陣営に競争相手があり、それぞれの相手と対戦して打ち勝てば身分の精進や賞品などの褒賞を得ることができる。褒賞とは身分の精進や賞品、表彰であるとされている。

つまり、『学事規定』から導かれるようなイエズス会学校の教育においては、生徒は綿密に規定されたカリキュラムに否応なく服従せざるを得ない。服従しなければ鞭打ちか退学である。前節ではイエズス会において勉学(studio)をも包摂する言葉としてのexercitiumないしexercitatioは「服従の徳(virtus obedientiae)」獲得を目指した「キリスト者にふさわしい習慣(Christiani digni mores, habitus, consuetudo)」形成の手段であると定義づけたが、『学事規定』において「キリスト者にふさわしい善い習慣」を身につけ「神に喜ばれる善徳」に心を向けることを目的とし、「記憶の修練」を軸とした多種多様な修練(exercitatio)は、そのまま服従する習慣の獲得を要求する。学生は教師と学習方法に「教室でも自宅でも」服従すべきである[RS:271]。しかしその際生徒が熱心に勉強に励み服従するよう、競争と褒賞によってインセンティブが与えられている点は実に巧妙である。この組織では最高の名誉に与った者がその実最も服従しており、最後まで服従し切る者のみが神学課程までたどり着きカリキュラム(curriculum=走路)を完走することができる仕組みがヒエラルキー構造の中で実現されているのである。この意味で、『会憲』と『学事規定』に導かれたイエズス会の学校教育は細部まで「服従の徳」獲得への配慮に貫かれていたと言えよう。「服従の徳」を獲得することは自分の意志で服従するか否かを決めるようになるのではなく、イグナチウスの言葉を用いれば、「老人の杖」や「屍」の如く自動的に服従する主体になることであり、意識されない程にも服従が定着、習慣化することである。それを可能にする装置が、複雑で絶え間のない「修練(exercitatio)」であったと結論づけることができる。『霊操』が修練者の生活を一時間単位で細密に規則づけていたことを思い返せば、『学事規定』においても同様にイエズス会士が持つ「生の規則(regla vitae)」への意志を見てとることができるのではなかろうか。

5. 小括

本稿では従来個別的に研究がなされる傾向があった霊的修練としての『霊操』と初期イエズス会教育実践の二つの側面を、ラテン語exercitium, exercitatioという言葉に着目して分析することで整合的かつ説得的に把握することを試みた。以下示し得た成果を記す。

はじめにexercitiumの系譜を粗描した。古代ギリシャ語で「修練」を意味するἄσκησιςやμελέτηはプラトンや擬プルタルコス、アレクサンドリアのクレメンスらのテキストにおいて習慣形成の文脈で用いられ、exercitiumはそれらの語彙を翻訳するのみならず相当する言葉としてケケロやトマス・アクィナスの著作へと受け継がれた。同時にカッシアヌスに代表されるような修道院における長上への服従を旨とするexercitiumは共同生活兄弟会を通じて習慣形成としての修練と統合されるに至る。その伝統を引き継ぎイエズス会の創始者であるイグナチウス・デ・ロヨラはexercitiumの注釈書とも呼ぶべき『霊操』においてキリスト教

的修練の技術を集成し、修練者の一ヶ月の一時間までをも細緻に、合理的に秩序づけるプログラムとして完成させた。そこでは霊操指導者が修練者をあらゆる性質を考慮に入れた上で間断なく管理し、最終的には修練者が神に導かれるままになるという、霊的導きの強固で新たな関係性が練り上げられ、その後のイエズス会の形成と発展に甚大な影響を与えた。「識別 (discretio)」と呼ばれる主体の解釈学 (術) が取り上げなおされた点も看過できない。

次に従来のイエズス会研究 (とりわけ日本における) では見落とされる傾向があった『会憲』と『書簡』を分析したが、イエズス会固有の徳が「服従の徳 (virtus obedientiae)」であると幾度も明言されていたことは強調せねばなるまい。またイエズス会の「教育 (instructio, disciplina)」活動は「靈魂を助ける (animas juvare)」という司牧の目的に導かれていたことを示し、イエズス会において勉学 (studio) をも包摂する言葉としてのexercitium ないし exercitatioは「服従の徳」獲得を目指した「キリスト者にふさわしい習慣 (Christiani digni mores)」形成の手段であると定義づけることができた。

最後に『学事規定』でも青少年の柔軟な心を「キリスト教者にふさわしい習慣」と善徳に向けて教育 (disciplina) するという目的が明記された。exercitiumの歴史また就中『会憲』との連続性を示すこの観点から『学事規定』における「記憶の修練」を軸とした多種多様な修練 (exercitatio) を分析することで、その緻密さという点で『霊操』とも近似を見せるカリキュラムがやはり学生を「服従の徳」獲得ないしは服従の主体へと合理的に形成する目的のもと組織されていることを示唆するに至った。この点の更なる解明のためには、イエズス会が受け継いだとする共同生活兄弟派が生み出した「パリ方式」について究明する必要があるだろう。

註

- ¹ *Autobiografia, Obras Completas de San Ignacio de Loyola*, Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid, 1963, p.89 (『ある巡礼者の物語』門脇佳吉訳, 岩波文庫, 2000年, 15頁) 以下邦訳は適宜改めた。
- ² O'Malley, J. W. *The First Jesuits*, Harvard U.P., 1993, p.372
- ³ Rabbow, P., *Seelenführung: Methodik der Exerzitien in der Antike*, Kösel, 1954, p.17
- ⁴ Hadot, P., *Exercices spirituels et philosophie antique*, Albin Michel, 2002, p.21
- ⁵ Leclercq, J., 'Exercices spirituels', *Dictionnaire de Spiritualité*, tome IV, Beauchesne, 1957, cols.1902-1950
- ⁶ Durkheim, É., *L'évolution pédagogique en France*, P.U.F., 1969, p.274 (『フランス教育思想史』小関藤一郎訳, 行路社, 1981年, 477頁)
- ⁷ Bourdieu, P. et Passeron, J.C., *La reproduction*, Minuit, 1970, p.178 (『再生産』宮島喬訳, 藤原書店, 1991年, 172 頁)
- ⁸ Ariès, Ph., *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Seuil, 1973, p.183 (『〈子供〉の誕生』杉山光信, 杉山恵美子訳, みすず書房, 1980年, 164頁)
- ⁹ Foucault, M., *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard, 1975, p. 171 (『監獄の誕生－監視と処罰－』田村俣訳, 新潮社, 1977 年, 151頁)
- ¹⁰ 高祖敏明「イエズス会学校」『ルネサンスの教育思想 (下)』上智大学中世思想研究所,

1986年

- ¹¹ 桑原直己『キリシタン時代とイエズス会教育』知泉書館, 2017年など。
- ¹² Leclercq, J., 'Exercices spirituels'; *Dictionnaire étymologique de la langue latine histoire des mots*, Klincksieck, 2001, 'exercitus', p.205
- ¹³ Plato, *Phaedo*, Platonis Opera, t.1, ed. J. Burnet, Oxford U.P., 1995, 81e ; Ficino, M., *Divini Platonis Opera omnia*, Lugduni, 1590 (『パイドン』岩田靖夫訳, 岩波文庫, 1998年, 82頁)
- ¹⁴ Plato, *Republic*, Platonis Opera, t.4, ed. J. Burnet, Oxford U.P., 1978, 518e ; Ficino, M., *Divini Platonis Opera omnia* (『国家 (下)』藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1979年, 105頁)
- ¹⁵ Plutarque, *Œuvre Morales*, t.1, Les Belles Lettres, 1987, p.35; Plutarchus, *De liberis educandis*, Trad. Guarino de Verona, Padova, 1471 (『子供の教育について』『モラリア1』瀬口昌久訳, 京都大学学術出版会, 2008年, 6頁)
- ¹⁶ Aristotle, *Politica*, ed. W. D. Ross, Oxford U. P., 1957, 1332a (『政治学』山本光雄訳, 岩波文庫, 1961年, 342頁)
- ¹⁷ Cicero, *On the Orator*, I-II, Loeb Classical Library, 1948, 2.298 (『弁論家について (下)』大西英文訳, 岩波文庫, 2005年, 60頁)
- ¹⁸ Ibid., 2.358 (98頁)
- ¹⁹ Clément d'Alexandrie, *Stromate I*, Cerf, 1951, 7.7.46.9 ; *Clementis Alexandrini omnia quae quidem extant operi*, Gentiano Herueto Aurelio interprete, Florentiae, 1551 (『ストロマテイスI』秋山学訳, 教文館, 2018年, 334頁)
- ²⁰ Aquinas, T., *Summa theologica*, tomeII, Parisiis, 1923, p.281 (『神学大全 第11冊』稲垣良典訳, 創文社, 1980年, 292頁)
- ²¹ Cassien, J., *Institutions cénobitiques*, Sources chrétiennes, Cerf, 1965, p.154
- ²² Ibid. p.160
- ²³ Ibid. p.157
- ²⁴ Thomas a Kempis, *Libellus spiritualis exercitii*, Opera omnia t.2, Friburgi Brisgoviae, 1903
- ²⁵ Thomas a Kempis, *Brevis admonitio spiritualis exercitia*, Opera omnia t.2, Friburgi Brisgoviae, 1903
- ²⁶ Klausmann, T., *Consuetudo consuetudine vincitur: Die Hausordnungen der Brüder vom gemeinsamen Leben im Bildungs- und Sozialisationsprogramm der Devotio moderna*, Tradition-Reform-Innovation. Studien zur Modernität des Mittelalters 4, Peter Lang, 2003
- ²⁷ Thomas a Kempis, *De imitatione Christi*, London, 1889, p.149 (『キリストにならいて』大沢章・呉茂一訳, 岩波文庫, 1960年, 126頁, 一部改訳)
- ²⁸ 桑原直己, 前掲書, 24頁
- ²⁹ O'Malley, J. W., *The First Jesuits*, p.23-25; Iparraguirre, I., 'S. Ignace de Loyola', *Dictionnaire de Spiritualité*, tome VII, Beauchesne 1971, cols.1266-1318
- ³⁰ 以下『靈操』のスペイン語原文は*Obras Completas de San Ignacio de Loyola*を参照し, ラテン語訳Ignatius de Loyola, *Exercitia Spiritualia*, Princeton Theological Seminary Library, 1920をも参照した。邦訳は『靈操』門脇佳吉訳, 岩波文庫, 1995年を参照。以下ESと略号化しラテン語版頁番号を括弧内に表記する。
- ³¹ Bataille, G., *L'Expérience intérieure*, Œuvres complètes tomeV, Gallimard, 1973, p.138 (『内的

体験』出口裕弘訳, 平凡社ライブラリー, 1998年, 272頁)

³² O'Malley, J. W., *The First Jesuits*, p.47

³³ Foucault, M., « *Omnes et singulatim* » : vers une critique de la raison politique, Dits et écrits 4 1980-1988, Gallimard, 1994, p.145 (「全体的なものと個的なもの—政治的理性批判に向けて」『フーコー・コレクション6生政治・統治』北山晴一訳, ちくま学芸文庫, 2006年, 326頁)

³⁴ Ibid., p.305 (270頁) discretioの修練はキリスト教の歴史程に古い。Athanase, *Vie d'Antoine*, Sources Chrétiennes 400, Cerf, 1994, p.196 (「アントニウス伝」『砂漠に引きこもった人々』戸田聡訳, 教文館, 2016年, 61頁), またCassien, J., *Conférences I-VII*, Sources Chrétiennes 42, Cerf, 1955, p.101 (「霊的談話集」市瀬英昭訳, 『中世思想原典集成精選2—ラテン教父の系譜』上智大学中世思想研究所編訳・監修, 平凡社ライブラリー, 2019年, 452頁) など。

³⁵ Weber, M., *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, Tübingen, 1920, p.116 (『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳, 岩波文庫, 1996年, 200頁)

³⁶ 高祖敏明「イエズス会学校」286頁

³⁷ O'Malley, J. W., *The First Jesuits*, p.27-36, ウィリアム・バンガート『イエズス会の歴史(上)』上智大学中世思想研究所監修, 中公文庫, 2018年, 32-53頁

³⁸ 『会憲』の成立過程についてはIparraguirre, I., 'S. Ignace de Loyola', cols.1272-1273を参照。

³⁹ *Constitutiones Societatis Iesu*, London, 1838, p.29 (『イエズス会会憲—付会憲補足規定—』イエズス会日本管区編訳, 梶山義夫監訳, 南窓社, 2011年, 124頁, 強調筆者) 以下Cと略号化し原著と翻訳頁番号をそれぞれ括弧内に表記する。

⁴⁰ *Cartas, Obras Completas de San Ignacio de Loyola*, p.769 (『イグナチオ・ロヨラ書簡集』中村徳子訳, イエズス会ペンクラブ, 1972年, 111頁)

⁴¹ Ibid., p.815(136頁)

⁴² イグナチウスが書簡の中で「セミ・ペラギウス主義」と非難されたカッシアヌスの著作を引用し, アウグスティヌスをほとんど引用しないのは興味深いことである。イグナチウスのペラギウスの傾向についてはO'Malley, J. W., *The First Jesuits*, p.37を参照。

⁴³ 寺崎弘昭「〈教育〉の生成とその構造」『教育原論』学文社, 2018年, 21頁

⁴⁴ *Autobiografía*, p.115(114頁)

⁴⁵ O'Malley, J. W., *The First Jesuits*, p.16

⁴⁶ Ibid., p.208

⁴⁷ Cisneros, G., *Ejercitatorio de la vida spiritual*, Barcelona, 1857, p.102(*Book of Spiritual Exercises*, London, 1876, p.11)

⁴⁸ Ibid., p.38(140頁)

⁴⁹ 1551年6月1日付アントニオ神父宛書簡では, 「師父(イグナチウス)は, イエズス会士の勉強目的を考慮され, 一に服従 (obediencia), 二に共同善 (bien común), 三に大きな信心 (gran devoción)」であると述べられている。*Cartas*, p.762 (98頁)

⁵⁰ Ibid., p.682(44頁)

⁵¹ 以上『イエズス会の規範となる学習体系』ロバート・キエサ訳・注, 教文館, 2023年における「『イエズス会の規範となる学習体系』その誕生と発展」, またウィリアム・バンガート『イエズス会の歴史(上)』60-64頁を参照。

⁵² 『イエズス会の規範となる学習体系』13頁

- ⁵³ Codina, G., *Aux sources de la pédagogie des jésuites: Le «Modus parisiensis»*, Institutum Historicum S. I., 1968
- ⁵⁴ O'Malley, J. W., *The First Jesuits*, p.214, 225
- ⁵⁵ Vincent J. Duminuco, S. J. ed., *The Jesuit Ratio Studiorum of 1599: 400th Anniversary Perspectives*, Fordham U. P., 2000, chap.2, 3
- ⁵⁶ 石田治頼「『イエズス会学事規程』にみる教育とハビトゥス形成」『日本の教育史学』57巻, 教育史学会, 2014年, 97-109頁
- ⁵⁷ 『イエズス会の規範となる学習体系』179頁, 本書は羅和対訳であるため原文もここで参照した。以下RSと略号化し括弧内に翻訳頁のみを示す。
- ⁵⁸ 白水浩信「Disciplinaの系譜学: サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』, 2021年, 42頁
- ⁵⁹ Codina, G., *The “Modus Parisiensis”*, *The Jesuit Ratio Studiorum of 1599 : 400th Anniversary Perspectives*, p.37
- ⁶⁰ Benedictus, *La Règle de Saint Benoît*, tome II, Cerf, 1972, p.538 (『聖ベネディクトの戒律』吉田暁訳, ドン・ボスコ社, 2006年, 78頁)

[付記] 本研究の成果の一部は科研費（23K02153）の助成を受けたものである。

Exercise in the Early Jesuits' School: Habit Formation and Virtue of Obedience in their *Constitutions* (1558) and *Plan of Studies* (1599)

Madoka SHIMOBUCHI

Key Words

The Jesuits, Ignatius de Loyola, exercise, exercitium, ἄσκησις

Abstract

Jesuits' spiritual exercises have been regarded as the culmination of the discipline since ancient philosophy by some philologists (e.g., Paul Rabbow). In the context of the history of education, many scholars have argued that the Jesuits contributed to the founding of modern schools (e.g., Philippe Ariès). This article intends to grasp these two aspects of the early Jesuit, which have tended to be analyzed separately in previous studies, in a coherent manner by focusing on the Latin words *exercitium* or *exercitatio*. This attempt also responds to the following question: What exercise actually is, and how is it integrated into modern schools?

The treated texts are *Spiritual Exercises* (1548) by Ignatius de Loyola (1491-1556), the founder of the Jesuits; *Constitutions* (1558), which set out the main rules of the Jesuits; and *Plan of Studies* (1599), which established the regulations of their schools.

The ancient Greek words ἄσκησις and μελέτη were used in the context of habit formation in the texts of Plato, Pseudo-Plutarch, and Clement of Alexandria. *Exercitium* was not only a Latin translation of those words but also their equivalent, and it was carried over into the writings of Cicero and Thomas Aquinas. At the same time, the monastic concept of *exercitium*, which was based on obedience to a superior, was combined with habit formation through Modern Devotion. Ignatius de Loyola inherited this tradition, and in his *Spiritual Exercises*, he compiled the arts of Christian exercises into a detailed and rational program for structuring the life of novices.

Next, *the Constitutions* and Ignatius' Letters were analyzed. It must be emphasized that the Jesuits repeatedly assert that their distinctive virtue is that of obedience (virtus obedientiae). Jesuits' educational works were conducted with the pastoral aim of helping the souls (animas juvare), and *exercitium* or *exercitatio* was defined as a means of forming Christian habits (Christiani digni mores), aiming to acquire the virtue of obedience.

Finally, *the Plan of Studies* (1599) clearly states that it aimed to train young people with flexible minds toward Christian habits. By analyzing the various types of *exercitatio* centered on the exercise of memory in *the Plan of Studies* from this perspective, it is suggested that an extremely detailed curriculum was organized with the aim of instructing students in virtue of obedience. It can be said that this study has paved the way for the historiography of education as the arts of exercises.

